



**研修部・専門委員会の
あゆみ**

研究協力校（公開研究発表校）

自ら学びを創る子どもの育成

～自己調整力を育む授業づくり～

三泉小学校

I 主題設定の理由

令和4年度より「自ら学びを創る子どもの育成」を研究主題として、付けたい資質・能力を整理し、それらが高まることを目指して授業づくりに取り組んだ。その結果、単元構成や課題設定・学習形態の工夫、自己決定の場の設定、タブレットPC端末や動画の活用などが主体的な学びに有効であることが分かった。

さらに、主体的に学びを創るには、子ども自身が自分の学びを最適となるように調整する力を付けることが必要と考えた。そこで、今年度は、付けたい資質・能力につながる基盤となる力として「自己調整力」を育み、自ら学びを創る子どもの育成を目指して研究を進めてきた。

三泉小学校で考える「自己調整力」とは、

- ・学習に意欲をもち、自分の目標や見通しを考える力
- ・自分に合う学習方法や工夫を選択・決定して学びを深める力
- ・自分の学習を振り返ることで、自分の課題に気付き、次の学習に生かす力

II 研究の内容

1 研究の視点

- ① 学習に意欲をもち、自分の目標や見通しを考える力を育む手立て
- ② 自分に合う学習方法や工夫を選択・決定して学びを深める力を育む手立て
- ③ 自分の学習を振り返ることで、自分の課題に気付き、次の学習に生かす力を育む手立て

2 研究の方法

(1) 付けたい資質・能力を明確にした授業づくり

本校の子どもに付けたい資質・能力は、学校教育目標と目指す子どもの姿を受けて、「表現力」「思考力」「主体性」の3つとする。自己調整力は、それらの基盤となる力と捉える。さらに、発達段階に合わせ、低・中・高学年のブロックごとに付けたい資質・能力を設定する。

(2) 「課題」と「めあて」を分けて考える

- * 「課題」・・・学習のねらいに応じて、教師から提示したり、全体で設定したりするもの
- * 「めあて」・・・課題を受けて、子ども一人一人が自分で設定するもの

(3) カリキュラム・マネジメント表の作成

学期ごとに短期カリキュラム・マネジメント表を作成する。ブロックごとの付けたい資質・能力を受けて、自分の研究中心教科についてより具体的な資質・能力を設定し、明記する。

(4) 手立ての積み重ねによる全体構想図の作成

授業研究会や日常の授業の中での子どもの姿を見取り、それぞれの視点にそって有効であった手立てを追記していき、全体構想図を作っていく。

(5) レーダーチャートで目指す姿を子どもと共有しながら授業づくりに取り組む

ブロックごとの付けたい資質・能力を受けて、学級ごとに「三泉っ子〇年生の目指す姿」レーダーチャートを作成する。拡大したものを教室に掲示し、目指す姿を子どもと共有する。日常的に振り返りを行い、追加や修正などをしながら活用していく。

3 具体的な実践

視点① … 学習に意欲をもち、自分の目標や見通しを考える力を育む手立て

<1年国語科「くちばし」>

「2年生にくちばしクイズを出す」という単元のゴールが見えていることで、意欲的に取り組むことができた。また、学習教材への関心も高まった。

<2年生活科「三泉の ひみつ・ふしぎ はっけん」>

単元全体を見通す計画カードを活用し、学習の流れを子どもと共有したことで、「見つけたひみつ・ふしぎを友達に教える」というゴールまでの見通しをもって学習に取り組むことができた。

視点② … 自分に合う学習方法や工夫を選択・決定して学びを深める力を育む手立て

<3年算数科「大きい数の筆算を考えよう」>

タブレットPC端末を基本としながら、ノートに書くのもよしとして選択肢を広げ、自分で考えやすい方法を選べるようにした。



<6年社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」>

タブレットPC端末・教科書・資料集などの様々な資料から選択・決定し、自分に必要な情報を意欲的に収集することができた。

<さくらんぼ学級（情緒）国語科「対話の練習」>

道案内の方法を考えるときに、2年児童は教師と一緒に考え、5年児童はタブレットPC端末を使用した。それぞれの実態に合わせた手立てをとることで学習意欲が高まった。

視点③ … 自分の学習を振り返ることで、自分の課題に気づき、次の学習に生かす力を育む手立て

<4年総合的な学習「わたしたちの寒河江川～三泉小寒河江川自然守り隊」>

タブレットPC端末を活用して振り返る時間を十分にとったことで、子ども同士で共有する時間がとれた。学習の見通しをもつことができ、次にどんなことをしたいか課題設定ができていた。

<5年体育科「体づくり運動（体力を高める運動1）」>

1回目の運動の後に友達からのアドバイスタイムを設けることで、2回目によりよい運動ができるようになり、振り返りで自己の変容に気付く手立てとなった。



Ⅲ 成果と課題

- ・ 学習の中で自分の目標や見通しを考えるには、単元のゴールや学習全体の流れを共有し、それを子ども自身が理解していることが必要である。そのための手立てとしては、学習全体を見通すことができる計画カードや学習シートの活用、ドキュメンテーションなどを使った活動を想起できる掲示が効果的である。また、全体の課題を基に自分のめあてを立てることで、課題を自分事にすることができる。今後、課題とめあてのつながりやめあてを立てる際のサポートの仕方について考えていく。
- ・ 自分に合う学習の仕方を選択・決定できる場を多く設けることで、子どもたちは意欲的に自らの学びを進め、深めることができる。具体的な選択・決定の場としては、情報収集のための方法、思考解決や発表の場面での方法や形態、学習のプログラム自体などがある。今後は、選択・決定する場の設定だけでなく、より深い学びにつなげるための適切な支援の在り方を考えていく。
- ・ 適切な場面に適切な方法で学習を振り返ることで、子ども自身が自分の課題に気づき、次の学習に生かすことができる。そのためには、振り返りの視点を明確に示すこと、発達段階に応じた振り返りであること、タブレットPC端末活用で共有することなどが必要であることが分かった。今後、評価の観点を公開し、振り返りとつなぐことについても考えていく。（渡邊里美）

研究協力校 (公開研究発表校)

自らの「できた」「わかった」をつないで学び続ける子どもの育成

南部小学校

I 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標は「学び確かに 心豊かに 体健やかに」である。そして、その目標に向かうための合言葉として「トライ&チャレンジ できた・わかった 南部っ子」を掲げている。学校教育目標を実現するためには、この合言葉に示される児童の姿をより具体的に捉え、そのような児童を育てるための教師の役割を明確にすることが必要である。以上のことから、学校教育目標の実現に資するために本研究主題を設定した。

II 合言葉の解釈と本研究で目指す具体的な児童の姿

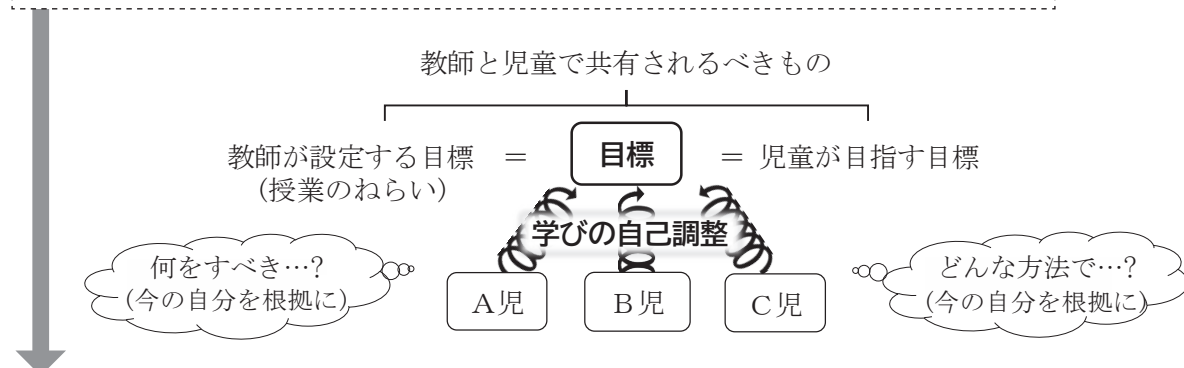
合言葉 「トライ&チャレンジ できた・わかった 南部っ子」

トライ (試しにやってみる) & チャレンジ (高いレベルのものに挑戦する)

今の自分を自覚する (何ができるのか、何ができないのか、なぜできるのか)

目標の設定・共有

学びの自己調整 (目標達成のために自分に何を課すか、どんな手段を選ぶか)



その子どもなりの“できた・わかった”にいたる

学びを振り返る (何ができるようになったのか、何ができないのか、なぜできるようになったのか、次にどうなりたいのか)

更に高度なトライ&チャレンジ

つまり、研究主題 「自らの“できた”“わかった”をつないで学び続ける子ども」とは…

- ① 今の自分を自覚し (振り返り)
- ② 目標達成のために学びを自己調整し
- ③ 学びを振り返り
- ④ 次の学びにつなげる …子どもである。

Ⅲ 研究の視点

研究主題に迫るためには「子どもが授業の主体」であることが大前提となる

子どもが授業の主体となるための土台（研究の視点には含めずに前提として）

- 1 教師と子どもの情報（ゴールの姿、評価に関する情報…）の格差をなくす。
- 2 子どもがその活動に必要感をもっている。
- 3 子どもが試行錯誤できる余地がある。
- 4 子どもがその学習に合った見方・考え方を働かせられる。

研究主題に迫るための研究の視点として以下の2つを設定する

視点① 振り返り 今の自分を自覚するための振り返りのあり方、学びをつなげるための振り返りのあり方

視点② 自己選択・自己決定 学びの自己調整につながる自己選択・自己決定のあり方

Ⅳ 実践と結果（○成果、●課題）

研究の視点①について	<p>ICTを活用した振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 文章を書く力が未発達の児童にとって声を録音する振り返りが有効にはたらく。 ○ 板書などの写真を使って「本時の学び」をまとめることで、学習内容の再構築を促すことができる。 ○ オンラインだと教師を介さずとも振り返りの共有が容易である。 ● 文章でまとめる力をどのように鍛えていくか。
	<p>振り返りの視点の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 必ず使うワードの指定をすることで、授業のねらいに合った振り返りを促すことができる。 ○ 「今日分かったことは～」「次に試したいことは～」など、書き出しを指定することが振り返りを身に付ける助けとなる。 ○ 単元のねらいに対する達成度をメーターで表示し継続して使用することで、ねらいに対する課題や自分の変容を意識しやすくなる。 ○ 「～ができればA」「～ができればB」のような客観的な評価の項目（ループリック）を設定することで、学習のねらいと関連させた振り返りを促すことができる。
	<p>適時の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業の中盤に振り返りの時間を設けることで、そこまでの学習の内容を整理したり、後半への課題を明らかにしたりすることができ、学びの深まりを促すことができる。 ○ 複数の課題があるような授業の場合、授業終盤にまとめて振り返るのではなく、活動一つに対して即時の振り返りが有効にはたらく場合が多い。
研究の視点②について	<p>考えをアウトプットする場の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の考えをアウトプットする場面（発表、帽子の色・手の挙げ方・ネーム磁石による立場の表明など）を設定することで、自分の考えを自覚したり自分の変容を意識したりすることを促すことができる。
	<p>選択課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 複数の課題の中から、自分に合うものを児童が選ぶことで学習への意欲を高めることができる。 ○ 振り返り（今の自分の自覚、次の課題）が適切に行われると、自己選択・自己決定に根拠が伴う。 ● 各々がそれぞれの課題にそれぞれのペースで取り組んでいる中で、考え方の正誤の判定をしたり考え方を広げたりする交流の時間をどのようにとっていくか、それぞれの理解度を教師がどのように把握していくか、更に研究を要する。 <p>教える時間の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自己選択・自己決定した課題によって学びが深まるためには、その課題をクリアするために必要な知識・技能が身に付いてついていることが前提となる。その際には教師が教える時間をしっかり設定した上で、子どもが学びを生かせる場を確保していかなければならない。

（工藤 宏貴）

研究協力校（公開研究発表校）

関わりを大事にし、自ら学びを創る子どもの育成

醍醐小学校

I 学校研究について

1 研究の概要

昨年度までの学校研究の成果として、進んで友達と関わり、協働的に課題解決に取り組もうとする態度や順序立てて説明したり、理由や根拠を明確にしたりしながら表現したりする力が身に付いてきた。一方、課題として、既習事項と結び付けながら、試行錯誤し、粘り強く課題を解決しようとする力や自分で課題を見付け、自分に合った学び方を自分で決めて学習を進める力、自己の学びを振り返る力などが十分に身に付いておらず、学びが自分のものになっていないことが見えてきた。

そこで、今年度は、「主体性」と「自己調整力」の2つの資質・能力の育成を目指し、「関わりを大事にし、自ら学びを創る子どもの育成」という新たな研究主題を設定し、学校研究を進めてきた。醍醐学を核としたカリキュラム・デザインを基に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体性」や「自己調整力」を発揮しながら、課題解決に取り組む自立した学び手を育てていきたいと考え、実践を進めている。

2 子どもに付けたい資質・能力

- ①主体性（自ら、気付き、考え、行動しようとする態度。課題解決に向けて、試行錯誤しながら、粘り強く取り組む態度。）
- ②自己調整力（自ら、課題を見付けたり、学習の計画を考えたりする力。学ぶ内容や学び方を選ぶ・決定する力。自己の学びを振り返る力。）

3 手立て

- (1) 見通す（スキーマの把握、めあてやゴールの共有、学習計画の設定）
- (2) 実行する（学習内容・学習ツール・時間配分などの選択・決定、考えの言語化・可視化）
- (3) 振り返る（適応題への取組み、課題に即したまとめ、振り返りや学習評価の工夫）

II 実践例（公開研究会の授業から）【成果○と課題●】

1 1・2年複式学級 国語科 1年「じどう車くらべ」「じどう車ずかんをつくろう」

2年「馬のおもちゃの作り方」「おもちゃの作り方をせつめいしよう」

- 単元の導入で、子どもたちと単元のめあてを設定し、本単元で付けたい力を児童と共有した。そして、一緒に学習計画を立て、学習計画に沿って学習を進めることで、子どもたちが主体的に目的意識をもって学習を進める姿が見られた。（1・2年）
- 説明文の読み取りでは、「問い」には直線、「答え」には波線を引いたり、言葉と挿絵を線で結んだりしながら読み進めていくという学び方を繰り返し行った。そのことで、説明文の学び方が身に付き、主体的な学びにつながった。（1年）



- 間接指導から、直接指導に戻った時、子どもをどう見取ればよいのか。複式ならではの教師の「待ち」と「出」を意識した授業づくりを行う必要がある。(1・2年)

2 5・6年複式学級 算数科 5年「比べ方を考えよう(1)」 6年「順序よく整理して調べよう」

- タブレットPC端末を活用し、疑問に思ったことや気付いたことなどを随時入力させ、思考の過程を言語化したり、友達をつぶやきや考えをタブレット画面上で自由に見たりすることで、課題解決のヒントが得られ、見通しをもって、粘り強く学習に取り組むことができた。(6年)
- 目的に応じて、よりよい方法を選択し、筋道を立てて調べる力や自分の考えを表現する力が身に付いてきた。(5・6年)
- 最後に個に返す時間を確保し、学びが自分のものになったか、今日学んだことが他の教科や生活場面のどんなところに生かせそうかなどを振り返る時間を設ける必要がある。(5年)
- 全体交流が発表会になってしまっていた。深い学びを生むための交流の仕方を工夫していく必要がある。(6年)



3 しえん1 (特別支援学級 知的) 国語科 2年「お手紙」 生活単元学習 4年「自分の思いを伝えよう」

- スキーマを把握し、友達と関わりたい・自分の考えを伝えたいという子どもの意欲を大切に、人との関りを重視した単元構成や学習内容にしたことが、付けたい力を身に付ける上で効果的であった。(2・4年)
- 自分の学びたいことや学ぶべきことを子ども自身が分かっていることが、自己調整力を育む上での第一歩となる。子どもとめあてや付けたい力をしっかりと共有して、学習を進めていくことが大切である。(2・4年)



Ⅲ 今年度を振り返って

昨年度から、山形大学学術研究院 野口徹教授のご指導の基、醍醐学を核にしたカリキュラム・デザインを作成し、付けたい資質・能力をベースにした授業づくりを行ってきた。それにより、指導者が付けたい力を明確にしながら授業実践を行い、教育課程の質の向上につながった。今年度の成果として、単元の導入で、付けたい力やゴールを子どもと共有し、興味・関心などに合わせた学習計画を立てたことで、見通しをもち、子どもたちが主体的に学ぼうとする態度が育ってきた。また、指導者が学習環境を整え、子どもたちが、自分で学習ツールや学習形態などを選択・決定したり、思考を言語化・可視化したりすることで、自分で自分の学びをモニタリングしながら、学び方を調整し、最後まで粘り強く課題解決に取り組もうとする態度が育ってきている。

今後は、複式ならではの学び方を生かし、教師の「待ち」と「出」を意識した授業づくりや子ども自身が自分の学びを自己評価したり、自分の学び方を振り返ったりすることで、本校で目指す「主体性」と「自己調整力」を更に育てていきたい。

(佐久間 陽子)

研究協力校（初年度研究校）

自ら学びに向かい、論理的な思考力を高めるための授業づくり ～ ICT 機器の特性を活用した授業改善～

陵東中学校

I 主題設定の理由

本校の学校教育目標「自ら考え、正しく判断し、行動できる人間性豊かな生徒の育成」における目指す生徒像に「知性あふれ想像力のある生徒」がある。その育成のために、学校経営の重点として「一人一人の学びを保障する授業づくりを徹底する」を掲げている。生徒の実態（授業・家庭学習での様子、学力検査結果、学習アンケートなど）から、本校の目指す『伸ばしたい10の力』のうち、「論理的思考力」「共感的態度」「自己調整力」「メタ認知力（振り返る力）」の4つの力を伸ばすことを重点にして取り組んでいく。

育成を目指す資質・能力 <<伸ばしたい10の力>>

【認知的資質・能力】	【社会的資質・能力】	【実践的資質・能力】
論理的思考力	貢献的態度	粘り強さ
見通す力	共感的態度	探究心
伝える力	協働する力	自己調整力
メタ認知力（振り返る力）		

II 研究目標と視点

- 1 学ぶことに興味・関心をもち、自ら学びに向かおうとする生徒の育成
 - ・探究的な学びを促す工夫
 - ・振り返りを次の学びに生かす工夫
 - ・見通しをもたせる工夫
 - ・授業と家庭学習のつながりによる「自己調整力」育成
- 2 多様な視点から考えを整理し、順序立てて考える力（論理的な思考力）の育成
 - ・情報の意味を正しく読み取る力の育成
 - ・多様な視点から整理する力の育成
 - ・順序立てて考える力の育成
- 3 授業づくりの手立てとしてのICTの活用
 - ・ICT機器の特性と活用場面、期待する効果とねらいを明確にした授業づくり

III 成果と課題

- 基礎基本を習得させるための手立て、ステップを的確にすることで、一人一人の学びを定着させることができた。（見通しをもたせる工夫）
- 課題解決のためのヒントを板書し、活用できるようにした。最後に学びの確認に使うことで、授業と家庭学習をつなぐことができた。（授業と家庭学習のつながりによる「自己調整力」育成）
- タブレットPC端末で、互いの解き方を参考にすることで、考え直しや相手に伝わるように説明し合うことができた。（多様な視点で整理する力、ICTの活用）
- タブレットPC端末のボイスメモは、即時に声を確認できて有効的であった。比較することで練習の成果を実感できていた。（多様な視点から整理する力の育成、ICT活用）
- 宿題や授業中の問題の「解答解説」をオクリンクで送ることで、家庭学習で自分の学びを確認することができた。（授業と家庭学習のつながりによる「自己調整力」育成、ICT活用）
- 全員に課題を具体的にイメージさせるため、自分の生活に置き換えさせることも必要である。
- 根拠を基に説明するために、何を根拠とするかを考えることを積み上げさせていきたい。

（菊地 悦子）

研究協力校（初年度研究校）

進んで自分の考えを表現する子どもの育成

柴橋小学校

Ⅰ 主題設定の理由

本校では、昨年度「算数科『説明する授業』の指導法の工夫」を研究主題として授業実践を重ねた。児童の姿から、受け身の学習ではなく主体的に学ぶための課題設定や、学習したことが自分の中だけにとどまらず、他者に自分の考えを伝えることで学習につながりや広がりをもたせること、また、教師側が目指す子ども像を明確にすることなどの課題が挙げられた。そこで、今年度は、「進んで自分の考えを表現する子どもの育成」を主題とし、研究を進めることにした。

Ⅱ 研究の視点

【視点1】子どもが主体的に学ぶための工夫

子どもたちが主体的に学ぶためには、課題が自分事になる必要があると考える。そこで、「なぜ」「どうして」「考えてみたい」という思いを抱けるような課題との出会わせ方や、学習意欲が持続するような単元構成の工夫を取り入れた授業実践に取り組むこととした。

【視点2】子どもが自分の考えを表現するための工夫

山形県全体の課題として、算数科における「説明する力」が挙げられている。本校の児童の姿を振り返っても、自分の考えを表現する力が課題として見られる。自分の考えを発信し他者とつながることで、自分だけでなく、他者の学びをも豊かにするための手立てを工夫していく。また、表現しやすいような雰囲気や土台とし、表現するための手段としてICTの活用も様々な授業で取り入れていく。

Ⅲ 成果と課題

- 単元や1時間の授業の流れを共有し、見通しをもって取り組むことにより、学習へ向かう意欲が高まっている。また、ICTを活用し、発言ではない方法で自分の考えを表現できる場を作ることによって、様々な考えをもった子どもたちが安心して自分の意見を発信することができた。



- 学習方法を選択させる場面を取り入れることで、考えが未完成のままでも友達と交流する様子が見られた。分からないことを聞きに来た友達に説明したり、相手が理解できるまで何度も自分の考えを伝えたりする姿も見られた。その反面、自分自身にとって有益な学習方法を選択する段階まで至らずに、仲のよい友達だけとの学習になってしまうことも多かった。目的をもって学習方法を選択できるよう、方法選択の場面での意義付けをしっかりと行い、自分が分かればそれでいいということに留まらず、粘り強く取り組む姿や相手にも分かってもらおうとしていく姿を育てていきたい。

(研究主任 土田直樹)

研究協力校（初年度研究校）

自ら学び続ける子どもの育成

白岩小学校

Ⅰ 主題設定の理由

昨年度の研究の成果として、教師と児童の間で「単元の最後には何をするのか」「単元の計画はどのように進むのか」を共有することにより、粘り強く最後まで学習に取り組もうとする児童の姿が見られるようになった。

その一方で、学習に対して児童が受け身な姿勢であるという課題も明確になり、以下のような3つの課題が見られた。

- 1 教師と共に作った単元計画どおりに学習を進めようとするのはできるが、ところどころで教師の「指示を待つ」
- 2 計画どおりに学んだ後に「次のめあてを設定することができない」
- 3 学びを通して「よりよい姿を求めようとしない」

今年度は、学校教育目標の変更に伴い、白岩小学校で育成を目指す資質・能力も数年ぶりに見直しを図った。これまでの研究で培ってきた「主体性」「表現力」「自己コントロール力」の育成をベースにしなが、新たに本校の児童に付けたい資質・能力を以下の3つと捉えた。

「自己決定力」「自己調整力」「自己表現力」

令和の日本型教育を進める方向性として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」がある。個別最適な学びの視点となる資質・能力として「自己決定力」を設定し、協働的な学びの視点となる資質・能力として「自己表現力」を設定した。そして2つの往還の中に、自分の学びを評価し、試行錯誤しながら学びを進めていくことができる資質・能力として「自己調整力」を設定し、これら3つの資質・能力の育成を図ることで「自ら学び続ける子ども」の育成につながると考えた。

Ⅱ 子どもに付けたい資質・能力

「自己決定力」 経験や知識、関心を基に自分の意志・判断で学習を進めようとする力

「自己調整力」 自らの状況を把握し、進め方を試行錯誤する力

「自己表現力」 相手意識をもって、自らの考えを表現する力

Ⅲ 成果と課題

- 自己決定力の場面の際に、自分の経験や関心に基づき一人一人の学びの道筋を立てることができると、自己調整力や自己表現力の高まりが見られることが確認できた。
- 研究全体会や授業研究の際に資質・能力ごとの目指す学びの姿をバージョンアップすることができた。そのため、試行錯誤について学年ブロックごとの段階を確認できた。
- 自己調整力の手立てとして、学びの蓄積を残し、思考過程を言語化できるような手段や方法も有効であることを共有することができた。
- 3つの資質・能力の関連について明確化できるような取組みを進めていきたい。

(秋場 紀宏)

1 陵東中学校区部会

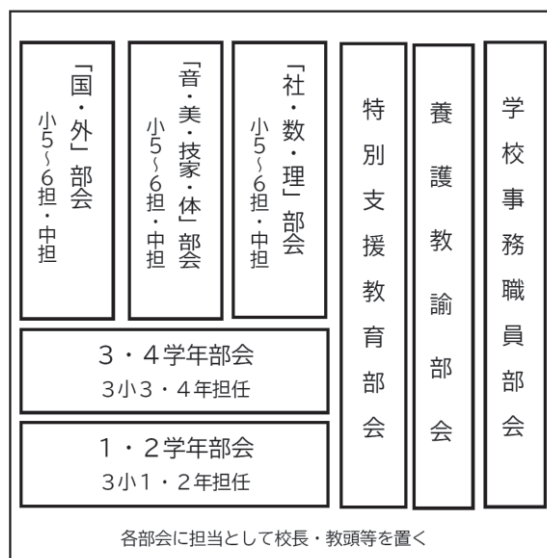
自ら考え、判断・行動する子どもの育成

I はじめに

子どもの9年間の成長を意識しながら、特に中学卒業時まで期待する「自立」「自律」の精神をもつ生徒像に校種を超えて目指していくために、小中が連携して研修テーマを設定し、教科や児童生徒の発達の特性などを踏まえながら実践を積み重ね、成果と課題を共有できる研修に努めた。

II 研修の進め方

- 小学5年から小中連携を強く意識するとともに、教科の特性を踏まえながらテーマに迫る研修を推進するため、右図のとおり組織とする。
- 小学4年までは、3小学校が課題を共有し、同一歩調で陵東学区の子どもを育てる。
- 特別支援教育部会については、担当職員だけでなく、研修ニーズに応じて広く所属を認める。
- 所属する部会員が行う授業研究会には計画的に参加するようにし、小中連携しながら授業力向上に努める。



III 研修の概要

1 研修部会組織

	氏名		氏名
会長	小野 行彦 (陵東中)	子どもを語る会	原田 浩治 (西根小)
副会長	佐藤 匡一 (三泉小)	事務局	白林 和夫 (寒河江小)

部会	部会長	部会	部会長
1・2学年部会	柏屋 博之 (西根小)	「音・美・技家・体」部会	小野 行彦 (陵東中)
3・4学年部会	長岡 政彦 (三泉小)	特別支援教育部会	白林 和夫 (寒河江小)
「国・外」部会	鈴木 雅寿 (寒河江小)	養護教諭部会	原田 浩治 (西根小)
「社・数・理」部会	渡邊 基 (陵東中)	学校事務職員部会	佐藤 匡一 (三泉小)

2 研修内容

- (1) 第1回研修部会
- | | |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日時 | 令和5年5月8日 (月) 15:15～ |
| 場所 | 各部会長の所属校 |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ◇ 研修全体テーマの説明 (部会長) ◇ 陵東学区児童・生徒の現状と課題の共有 (陵東中学校) ◇ 本年度の公開研究発表について (三泉小学校) ◇ 各部会における研修テーマ・視点などの設定 |

- | | | |
|-------------|----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (2) 第2回研修部会 | 日時
場所
内容 | 令和5年6月28日(水) 15:15～
各部長の所属校(第1回研修部会と同じ)
◇ 各部会のテーマ・視点に係る児童生徒の状況の共有
◇ 課題解決に向けた具体的な手立ての構想・意見交流 |
| (3) 第3回研修部会 | 日時
場所
内容 | 令和5年11月28日(火) 15:15～
各部長の所属校(第1回研修部会と同じ)
◇ 各校における実践の報告・意見交流
◇ 研修報告のまとめ(成果と課題) |

3 各部会の取組み (テーマ、○成果、●課題)

【1・2学年部会】

話をよく聴き、つなげて考え、自分の思いを伝えるために

- 話型を学んだり、よい発表を手本として示したりしたことで、自分の考えと比べながら友達の話を聴き、違いに気付いたり、付け足したり、途中から引き継いで考えを説明したりすることができるようになってきた。
- ペア活動やグループ活動を仕組み、経験を重ねることで、自分の考えを言うことができるようになってきた。
- 単元の導入時に教師が発問を工夫することで、「読んでほしい」「喜んでほしい」などの思いをもって学習に向かうことができた。
- 子どもたちが自分事としてよく聴くためには、必要感があるとよい。教師が、子どもたちが友達の話を聴きたくなる発問や場面設定をしていかなければならない。

【3・4学年部会】

学びを自分のものにし、伝え合う力を付けるために ～読む・聞く・書く・話す力の育成～

- 音読では、ペアでの交互読みや指で追わせるなどパターンを増やすことや本の紹介、関連図書を身近に置くなどの工夫、書くことでは、調べ学習の自学や週末作文などの課題が有効だった。
- 話すことでは、役割を決めてグループでの発表が有効で、自分が得た知識を基に伝える力、聞くことでは、聞いたら反応する、聞く目的をもたせることが有効だった。
- 子どもが、読んだり、書いたり、聞いたりする必要感をもたせる取組みが有効である。
- 1回で聞き取る力、根拠を基に話す力、字数制限で書く力などを更に育成したい。

【「国・外」部会】

<国> アウトプットできる単元のゴールを設定した必要感のある授業づくり
 <外> 小中連携を意識した4技能の育成

＜国語＞

- 学習のゴールを明確にした授業を行うとともに、子どもたちの学びに応じてゴールを引き上げていくことで、子どもたちによりよい変容をもたらすことができた。
- アウトプットできるようにするためには、学習用語や学び方などをしっかりとインプットしていくことが大事であることを認識することができた。
- 自分の学びを自覚する振り返りや次時の学びに生かす振り返りを行うこと、学習用語を日頃から意図的に使っていくことで子どもたちの中に蓄積させ、それらを自在に活用でき

るように育てていくことを、日々の授業で大切にしていく。

＜外国語＞

- 小学校ではフォニックスを意識したアルファベットの指導やインプットからアウトプットまで段階的に指導していくことを意識し、外国語に十分慣れ親しませることができた。
- 中学校では、小学校も含めた既習事項を意識した音読指導や語彙指導を行い、知識・技能の定着につながった。
- 小中ともに、使いこなせる語彙を基本的なものから増やしていきたい。そのために、音声と文字がつながるような指導を心がけていく。

【「社・数・理」部会】

学ぶ楽しさを実感できる工夫

(社会)

- 映像資料や図の資料の活用によって、意欲的に子どもたちの学び向かう姿が見られた。
- 単元を貫く課題の設定し、課題を自分事として捉え、見通しをもって学習に意欲的に取り組んだ。社会科の見方・考え方を身に付けるために根拠を基にまとめる活動を大切にしている。

(数学)

- 自分の考えをもたせる時間と話し合う時間の確保を大切にしていることができた。
- ペアで学習の確認をしたり、グループでの話し合いで考えを深めたりする活動ができた。
- タブレットPC端末で振り返りを行うことで、自分の学習ログを蓄積したことで、自分の言葉でまとめる力が付いてきた。

(理科)

- 自由進度学習に取り組んだことで一人一人が意欲的に自分の課題を探究することができた。
- タブレットPC端末を活用して、実験結果や分かったことをすぐに共有したり、他クラスの実験結果を比べたりすることができるので、思考を深めることができた。
- タブレットPC端末のスペックの問題やWi-Fi環境の問題で、授業に支障をきたす場面が多いことが残念だった。

【「音・美・技家・体」部会】

教科・学年を横断する個別最適な学び

- 一人一人に応じた多様な教材や学習時間と方法などを柔軟に提供しながらも、個々が学習過程やゴールをイメージすることによって、学習が効果的に進められることが分かった。
- 教科・学年を超えた個別最適な学習には、意欲・目標・方法や振り返りも含め、個による「自己調整」「自己決定」の場面の設定が必要であることが分かった。
- 自分に合う学習方法の選択と決定により、自分なりのめあてとゴールが明確になった。
- 学習効果を広げたり生かそうとしたりしても、生活経験不足により、学習時の場面や条件との繋がりが不透明であった。
- 自分に合った学習方法の決定には子どもの特性を理解し思考に寄り添うことが重要である。
- 学習意欲や目標の拡大、さらには実践へと繋げるには、地域協働活動と連携が必要である。
- 振り返りにおいて、意欲・目標・方法へプラスに連鎖する繋がりを意識していく。

【特別支援教育部会】

個に応じた手立て、関わりを大切にしたい手立ての工夫

- Teamsを活用することで、学校との繋がりがや連絡のハードルが下がり、不登校生徒が登校できたり、事前に希望する時間割を生徒自身が決めたりするなどの効果的な支援ができた。

- 異学年学習のよさを生かし、お互いにより影響や刺激を与えることができた。
- 個に応じた手立てを取り、指導者が柔軟に指導を変化させることで、できることが増えた。
- 愛着の問題や家庭の影響など、多様な背景があるため、「ともに考える」姿勢を大切にする。
- 教師対児童の関わりから、手立てを取りながら少しずつ友達同士の関わりを増やしていく。
- 進路意識を高めるために進路について早いうちから保護者と話し合いを重ねる必要がある。

【養護教諭部会】

小中連携における9年間の主体的な生活習慣づくり
～メディア・コントロールを中心にして～

- 生活リズムを作っていくために、起床・宿題・就寝の「3点固定」のめあてがよかった。
- 「生活リズムアンケート」は子どもたちの実態を把握するのに有効だった。
- 元気アップ週間やそれに関連する保健指導など、子どもたちの健康増進の手助けになるように、これからも継続して指導していく。
- 元気アップ週間の取組み方に個人差があり、保護者への働きかけが難しい。内容がマンネリ化してきていることも含め工夫していきたい。
- 陵東学区統一して取り組んでいることを教職員・保護者と共有し、共通理解を深めていく。

【学校事務職員部会】

全体テーマを踏まえた子どもたちの学習環境整備

- 陵東学区事務の連携・共同実施会議と合わせて情報交換を行い、予算要求の参考にしたリ、他校の事例を取り入れたりするなどして役立てている。また、学校事務としての希望や計画を提案しやすい環境にある。
- 消耗品などの情報を共有することで、予算の有効活用につなげることができた。
- 備品の購入状況や物品活用状況、修繕業者の情報を共有し、学習環境整備について考えることができた。
- 課題を共有し教え合うことで新たな気付きへとつながり、各自の力量アップを図ることができた。
- 事務職員自身がICT環境整備やオンライン授業についてよく理解していない。
- 物価高騰などに伴い、消耗品費の支出が増えている。更に効果的な予算執行について考えていく必要がある。

Ⅳ おわりに

今年度も、全体テーマに沿って設定した部会ごとのテーマに向けて、所属する先生方が実践を積み重ね、互いに交流を行ってきた。また、11月1日に開催した「陵東学区子どもを語る会」では、キャリア教育・学習指導・生徒指導・小中連携の各分科会に分かれて話し合いを行い、「学びがつながる家庭学習」「自分から進んで大きな声でさわやかなあいさつ」を陵東学区全体で取り組むべき目標としていくことが確認された。

今後は、共有した成果や課題、陵東学区全体で取り組む目標について、各学校での日々の教育活動に反映させるとともに、より小中・小々の連携を進めて、目指す「自ら考え、判断・行動する子ども」の育成に努めていきたい。

(陵東中学校区事務局 鈴木 雅寿)

2 陵南中学校区部会

主体的に学び合う授業改善の推進

I はじめに

本会は、小中連携で授業改善を図るために授業研究会を中心とした悉皆研修とし、その積み重ねにより学力向上を図るという「ねらい」を明確にもちながら進めてきた。今年度は、4校それぞれの研究テーマや視点を尊重し、授業を参観した上で参集型の「授業についての話し合い」をもつ機会を年間4回と計画した。学年部会は、小学校では年度当初に所属を決定し、中学校ではその都度希望を取って申し込むこととしている。

II 研修の進め方

1 目的

- (1) 児童生徒の学力向上を目指し、陵南中学校区小中学校の研究・研修を通して、「分かる」「できる」授業づくりと主体的に学び合う姿を目指した授業改善を推進する。
- (2) 教職員が指導観を一にし、義務教育9年間で児童生徒の育成を図るための小中連携を推進する。
- (3) 地域の将来の担い手となる児童生徒の健全育成と自立を目指し、陵南中学校区の教職員、保護者が一体となって「地域とともにある学校づくり」を推進する。

2 基本方針

- (1) 各校の研究を尊重しながら、陵南学区4校全教職員で授業研究会を中心とした研修を行い「授業づくり、授業改善」に努める。
- (2) 陵南学区における課題を明らかにするとともに、教職員と保護者共通理解の下、課題解決に向けての取組みを行う。
- (3) 常に組織のあり方や取組みについて議論し、研究・研修の在り方、共通実践事項などについて改善を図る。

3 令和5年度組織

- 【名称】 寒河江市教育研究所・陵南学区研修会
 【会長】 陵南中学校長（陵南中学校が研究公開の年は、寒河江中部小学校長が会長）
 【副会長】 南部小学校長（研究公開校校長）
 【事務局】 陵南中学校教頭（会長校教頭）、南部小学校教頭、陵南中学校主幹
 【運営委員会】 4校の校長、教頭、主幹教諭
 【各部会】

部 会 名	構 成 メ ン バ ー
小中合同部会	全職員が所属
学年部会	各校ごとに、年度当初に所属部会を決定（6部会） 中学校職員は、その都度所属する部会を決める。
特別支援学級部会	特別支援学級担任 部会担当：那須校長（中部小）
養護教諭部会	養護教諭、栄養職員（陵南学区独自の会議の際、それ以外は市全体で） 養護教諭会担当：鈴木校長（柴橋小） 栄養教諭会担当：大竹校長（南部小）
学校事務職員部会	事務職員 部会担当：茂木校長（陵南中）
特別部会	構成メンバーだけが集まる年2回の部会

課題研究部会	各校より代表者1名（リーディングスキルテストに特化）
学力対策委員会	各校の研究主任など1名
領域別部会	各校の代表者により構成する部会（所属は下記のとおり）
学習指導部会	学習指導部長、研究主任 ☆担当 猪倉教頭（南部小）
生徒指導部会	生徒指導主任、生徒指導主事 ☆担当 菊地教頭（中部小）
教務主任部会	教務主任 ☆担当 柴橋小土田教頭
学校栄養職員部会	中部小と柴橋小と南部小の栄養職員（市全体で）
保護者部会	P T A 3 役（学校によっては4役）
* 臨時部会	* 必要に応じて（中学校1年生の情報交換 など）

4 今年度のテーマ（公開する学校の研究テーマ）

【南部小学校の研究主題】

自らの「できた」「わかった」をつないで学び続ける子どもの育成

今年度は、授業づくり、授業改善を目的に、参観と事後の話合いにおいて評価・検証する研修を中心に研修会（全員集会）を運営する。部会によっては視点を絞ることも可とし、授業を公開する学校によってはその学校のテーマや視点で評価・検証することも可とする。

Ⅲ 研修の概要

1 ここまでの研修内容

日時と会場	会 議	会議の大まかな内容
4 / 25 (火) 15 : 30 ~ 陵南中学校	第1回 運営委員会	・今年度の組織改編と、年間の計画について検討 ・第1回全員集会に向けた準備 コロナ感染予防に努めながら、本年度はできるだけ計画どおり実施すること、実際に授業を参観して話合いの場をもつことの確認をした。
5 / 10 (火) 14 : 00 ~ 16 : 35 陵南中学校	第1回 陵南学区研修会 (全員集会) (領域別部会) (小中情報 交換会)	○ 授業参観（5校時） 14 : 00 ~ 14 : 50 ・1年生と特別支援学級の計7クラスで授業参観 ○ 全体会 15 : 00 ~ 15 : 15 【各教室へ放送】 ・教育委員会より市教育研究所の趣旨等の説明 ・今年度の陵南学区研修会について ○ 各部会（小中合同部会） 15 : 20 ~ 16 : 00 ・事後の話合い（7ヶ所で） 参観した授業ごとに部会を設け、生徒の発達と身に付けさせたい資質・能力を捉えた「授業づくり」について話し合うことができた。 ・養護教諭部会開催（さがえっこ元気アッププロジェクト） ・事務職員部会開催（事務連携共同実施について） ○ 領域別部会 16 : 05 ~ 16 : 35 ・生徒指導部会開催（各校の生徒指導上の課題） ・学習指導部会開催（学校研究の情報交換） ・教務主任部会開催（小中交流会について） ・中学1年生の情報交換会（担任同士の情報交換）

日時と会場	会議	会議の大まかな内容
6 / 23 (金) 14:00～ 16:00 柴橋小学校	第2回 陵南学区研修会 (全員集会) (PTA部会)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業参観(5校時) 14:00～14:45 ・特別支援学級を含め、9つの授業公開及び部会を設定 ○ 各部会(小中合同部会) 15:00～16:00 ・9つの部会に分かれ、一人一人感想を述べていき、出された感想を基に部会ごと柱立てをして、話し合いを進めた。 ○ 各部会(PTA部会) 15:00～16:00 ・各校昨年度の『体力テスト』『全国学調生徒質問紙』の結果を持ち寄り、そこから考える「メディアとの上手な付き合い方」について話し合いをした。 (各校校長、教頭、PTA役員が参加) ○ 養護教諭部会・事務職員部会の開催
10 / 6 (金) 14:00～ 16:40 寒河江中部 小学校	第3回 陵南学区研修会 (全員集会)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業参観(5校時) 14:00～14:45 ・全クラス授業公開 ○ ポスターセッション 15:00～15:55 ・5つの分科会(夢中部・個に応じた指導・ICTの活用・自由進度学習・セルフスタディ)ごとに中部小が取り組んでいる実践について説明と質疑応答を行った。 ○ 講演(山形大学名誉教授 中井義時氏) 16:00～16:45 ・山大名誉教授の中井氏より「一人一人の教員、子どもが育つ学校」というテーマでの講演をお聞きした。 ○ 養護教諭部会・事務職員部会・栄養教諭部会の開催
11 / 17 (金) 13:50～ 16:20 南部小学校	第4回 陵南学区研修会 (全員集会) 市教委委嘱 公開研究発表会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体会 13:50～ ・研究の足跡と話し合いの視点を説明 ○ 授業参観 14:00～14:45 ・9つの授業公開及び部会を設定 研究主題 自らの「できた」「わかった」をつないで学び続ける子どもの育成 ○ 各部会(小中合同部会) 15:10～16:20 ・部会ごとに南部小の研究の視点「振り返り」と「自己選択・自己決定」に沿って話し合いを行った。「今の自分を自覚するための振り返りの在り方」や「学びをつなげるための振り返りの在り方」、「学びを自己調整するための、自己選択・自己決定の在り方」について話し合いを行った。 ○ 養護教諭部会・栄養教諭部会・事務職員部会の開催

2 これからの研修計画

日時と会場	会議	会議の大まかな内容
1 / 26 (金) 15:30～ 陵南中学校	第2回 運営委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の総括 ・次年度のあり方について検討

3 小中合同部会の成果と課題について

今年度の「授業についての話し合い」(授業づくり、授業改善)に取り組んだ成果

- ・ 小学校と中学校の校種を超えた授業参観を通して、9年間かけて付けていくべき資質・能力や小中のスムーズな接続について学区内で再確認することができた。
- ・ 「子どもたちが主体の授業」をしていくためには、「自分を自覚するため・学びをつな

- げるための振り返り」と「目標達成のための自己調整をしていく機会」が必要だと分かった。
- ・ 学校での実践を紹介する場を設けたことで、校種や教科、学校を超えた交流をする土台ができつつある。
 - ・ 学習課題を設定するには、生徒の発達段階を把握し、生徒理解が大切となる。この機会に小中学校の教員が生徒理解について話し合えたことで授業づくりの一助となった。

Ⅳ おわりに

昨年度は、全員集会の中止や内容の縮小などで本学区研修会の目的である教職員の研究・研修の場が十分ではなかった。しかし、今年度は南部小学校の公開研究会を中心に陵南学区の教職員が実際の授業を参観することで、授業改善を目指して研修する場を確保できたことが何よりだった。

今年度、中部小で「ポスターセッション」という形で自校の実践を発表したように、それぞれの学校で行われる全員集会、各部会の在り方などについては、部会の意向を汲みながら授業研究を柱に内容を検討していくようにしたい。
(陵南学区事務局長 齋藤 健)

3 陵西中学校区部会

主体的に学び 主体的にかかわる 児童生徒の育成

I はじめに

昨年度まで、陵西中学校区の児童生徒の課題である「表現力」の育成を行い、その結果、相手意識をもちながら、目的や状況に応じて分かりやすく伝えようとする姿が見られるなどの成果を得ることができた。

一方で、陵西中学校区小中学校それぞれの学校研究において「主体性」の育成をあげており、また、「学び」と同じぐらい「かかわり」も陵西中学校区の児童生徒に必要なものであることが、昨年度の総括で確認された。それらを踏まえて上記のテーマを設定し、小中連携のもと取組みを行うこととした。

II 研修の進め方

1 基本方針

- (1) 一人一人の児童生徒が「分かる」「できる」授業づくりを目指し、教員自らが主体的・対話的に学び合うような研修を推進する。
- (2) 児童生徒の実態（よさや課題）を明らかにするとともに、義務教育9年間で育む資質・能力や目指す姿を陵西中学校区の全職員が共有し、発育段階に応じた授業づくりや教育活動に関する研究および部会のねらいに即した研修を行う。
- (3) 児童生徒及び教職員にとって有意義な研修になるよう、研究のテーマや研修の進め方について議論しながら実践する。

2 各部会の研修内容

- (1) 小中合同部会は、授業部会と教育活動部会に分かれて実践研究を行う。
- (2) 特別支援学級部会は、部員の意見・要望を基にテーマを設定し、特別支援教育に関する研修を行う。
- (3) 養護教諭部会は今日的課題に関するテーマを設定し、小中が連携して実践することにより課題の解決（状況の改善）を目指す。
- (4) 学校事務職員部会は、事務の共同実施の一環として実務的な課題に関する研修を行う。

3 今年度の組織について

委員長…陵西中学校校長
副委員長…醍醐小学校校長（研究発表校）
事務局長…白岩小学校教頭（次年度発表校） 事務局員…高松小学校教頭
研究推進委員…各学校の教務主任

4 研修会のもち方

研究推進委員会（年3回）、全員集会（年1回）、研修部会（年2回）、授業研究会（年1回）を行う。研修部会は、内容や場所に応じて開始時刻や研修時間を検討する。

III 研修の概要

1 全員集会

- (1) 日時 令和5年5月8日（月） 14：20～16：40
- (2) 会場 白岩小学校
- (3) 内容 ① 全体会…山形大学教授・野口徹氏より、「主体的に学ぶ児童生徒の育成と授業改善」について、ご講演をいただいた。思考のプロセスについて言語化・

共有化を図る授業改善の視点について研修を行った。

② 各部会…研究テーマに迫るための実践計画書作成と計画内容の共有。

2 第1回研修部会

- (1) 日 時 令和5年7月11日(火) 14:10～16:40
 (2) 会 場 陵西中学校
 (3) 内 容 ① 授業参観…全所員が陵西中の授業を参観 ② 各部会…下記参照

< 第1回研修部会 各部会の内容 >

【 授業部会 】

実践計画の作成では、3グループ構成でグループ内交流を行った。各校児童生徒の実態や課題、目指す児童生徒の姿、具体的な手立てなどについて確認した。

- ・ 自己決定や自己選択の機会を設け、自分の思いを表現する力を育てる。
- ・ 単元構成の工夫や振り返りの活用を行う。
- ・ 仲間のアドバイスを生かし、関わる力を育てる。

【 教育活動部会 】

3グループに分かれて実践計画について話し合い、児童生徒の実態や課題をベースに、下記のように、目指す姿や手立てについての共有を図った。

- ・ 「児童会目標を達成しようとする子ども」を目指す。そのために、「めあてにせまるための委員会計画および実践」や「子ども同士での的確な振り返り」を行う。
- ・ 行事で「主体的に心と体を動かす生徒」を目指す。そのため「問いの工夫」や「振り返り」を行い、見通しをもって活動できるようにする。



【 特別支援学級部会 】

楯岡特別支援学校寒河江校教頭の土肥修氏を講師に招き、「陵西中学校区の特別支援学級・特別支援教育の課題とその対応について」をテーマに研修を行った。講話では、学習課題を定めるための実態把握の大切さ、および実態に合った支援のあり方など具体的な指導をいただいた。その後、全員集会において柱立てした「一人一人に合った教育のための実態把握」「学年をまたいだ授業づくり（複式学級のよさを生かす）」の2つに分かれ、指導いただいたことを踏まえて、それぞれのグループで具体的な手立てを考えた。

【 養護教諭部会 】

部会テーマ「一人一人に寄りそう支援のあり方～不登校の予防と対策について～」

このテーマに沿って各学校での実践について記録し、11月に改めて情報交換を行うこととした。なお、養護教諭部会では、広く児童生徒への支援について情報を共有していくが、不登校の予防と対策については、現状の理解と今後の対応についての研修が必要であることから、共通のテーマとして設けた。

【 学校事務職員部会 】

学校事務連携共同実施について、下記の各事項について確認・研修を行った。

- 8月事務スケジュールとして、家族調書・手当認定確認のメ切
- 6月分給与・旅費相互確認
- 家族調書、扶養・寒冷地手当の事務確認
- 備品点検の効率的な実施について ○ 市校長会への要望検討

3 醍醐小学校公開研究会

- (1) 日 時 令和5年11月10日(金) 13:30~16:45
 (2) 会 場 醍醐小学校
 (3) 内 容 ① 公開授業(3学級) ② 分科会 ③ 全体会

4 第2回研修部会

- (1) 日 時 令和5年11月28日(火) 13:50~16:40
 (2) 会 場 高松小学校
 (3) 内 容 ① 授業参観…全所員が高松小の授業を参観 ② 各部会…下記参照

< 第2回研修部会 各部会の内容 >

【 授業部会 】

「主体的に学び 主体的にかかわる 児童生徒の育成」のために、授業づくりで大切にしたいことをグループごとに話し合い、全体で交流を行った。

- ・ 内発的動機づけとなる「楽しさ」を重視する。(考える楽しさ、題材の楽しさ、つくることの楽しさ等)
- ・ 実生活に結び付く課題の設定を行う。
- ・ 児童生徒と共に「問い」をつくる。
- ・ 相手意識(〇〇のために、つくろう、書こう、説明しよう等)をもたせる。
- ・ グループINGの工夫(ねらいに沿った意図的な学習形態)を行う。
- ・ 学習のゴールの明確化(学習のゴールを全体で共有する)
- ・ ICTおよび既習事項の活用
- ・ 自己決定力(自分の思いをかたちにする)を育てる。
- ・ 振り返り(視点の明確化、モデリングなど)を生かす。



【 教育活動部会 】

「主体的にかかわる児童生徒の育成」を目指し、各自の実践内容を基に、グループおよび全体交流を行った。

- ・ 長縄大会に向けての取組みと優しい言葉の取組みを行った。参加者が気持ちよく行うことを目標に取組んだ。優しい雰囲気の中で活動できている。
- ・ 学習発表会の係を決めて、子どもたち自身で作りあげることで達成感をもたせ、主体性につなげた。
- ・ 陵西祭実行委員会を立ち上げ、生徒たちで作る活動とした。目的を明確にしながら取り組ませた。さらに、地域伝統の継承も大切にしたい。
- ・ 持久走記録会に向けて、音楽をかけるなど工夫した。やや主体性が見られたが、走らない子どもは走らない。子どもに「必要感」をもたせることが大事である。
- ・ 図書委員会の本の貸し出し冊数を増やすことを目標とした。実態から何ができるかを投げかけ、数値目標を掲げて取り組んだ。
- ・ 陵西祭の合唱の取組みを工夫した。教師は「待つ」を意識することで、生徒たちの頑張りや高まりを引き出すことができた。Teamsで録画内容を共有して振り返りを行った。練習計画表の活用も効果的であった。

【 特別支援学級部会 】

第1回研修部会にて「陵西中学校区の特別支援学級・特別支援教育の課題とその対応について」、楯岡特別支援学校寒河江校教頭の土肥修氏より指導いただいたことを基に、各部員の実践における成果と課題を共有した。自立活動の視点（6区分27項目）による実態把握や実態や障がいの特性を踏まえた指導などを通して、児童に学習の見通しをもたせることや児童の興味・関心のあることから課題を設定すること、短く簡潔な指示を出すことなどの成果が出された。

課題として、各部員とも、複式学級による個に応じた指導の難しさを挙げていた。

【 養護教諭部会 】

部会テーマ「一人一人に寄りそう支援のあり方～不登校の予防と対策について～」

各学校の実践から、不登校の予防と対策について、様々な視点で話し合いを行った。

《不登校予防の視点から》

- ・ 自尊感情を高める、自己選択の場をつくる、自己決定の場をつくる取組み。
- ・ 児童生徒の意思を尊重する関わりと良さを伝える言葉がけを大切にする。
- ・ できたことを意識させる言葉がけ。
- ・ 小さな目標を設定し、成功体験を重ねる。 ・ SCの活用⇔児童生徒との関係づくり。
- ・ サポートアンケートを実施する。 ・ 外部機関との接続や教育相談を実施する。

《気持ちが落ち込んでいる不登校児童生徒への対応の視点から》

- ・ 声かけの工夫が大切。「大丈夫？」では響かない。
- 児童生徒一人一人ささる言葉が違う。その子に合った言葉を探る。
- ・ 児童生徒の思いを引き出す関係づくり。
- ・ 児童生徒の好きなことを学校でやってみる。

《分離不安に対する対応》

- ・ 保護者も一緒に学校にいられる場所づくり。 ・ 授業に保護者が一緒につく。
- ・ 保護者と登校した時の保護者との引き離し方。

《保護者対応》

- ・ 保護者の対応が困難である。 ・ 保護者対応による関係職員のストレスが大きい。

【 学校事務職員部会 】

事務職員部会は通常の陵西中学校区事務の共同実施を行った。

- 12月事務スケジュール確認 ・ 12/4共同実施で年末調整読み合わせ
- 1月事務スケジュール確認 ・ ジブラルタ生命による「年金早わかり講座」研修予定
- 情報交換
 - ・ 年末調整について
 - ・ 人事院勧告ならびに退職に関わる改定について

IV おわりに

部会構成の見直しを行い、今年で3年目を迎えた。充実した研修を目指し、研修の目的や進め方について、部会間で共通理解を図りながら研修を行った。今年度は、新たな研究テーマ「主体性の育成」を設定し、各部会において児童生徒の目指す姿について具体的な話し合いを行い、指導方法の工夫と改善に取り組んできた。

今後も、児童生徒のよりよい学びを目指し、各学校のつながりや小中連携の視点を大切にしながら研修を進めていきたい。
(陵西中学校区事務局長 清野 淳子)

4 学校栄養職員部会

既習事項を生かした給食指導を目指して

～ 朝食・偏食・栄養バランスの取れた食事を通して学力向上を目指す ～

I はじめに

本部会では、昨年度から取組み始めた「9ヵ年を通した食に関する指導計画」の2年目となる今年度も各小学校との連携を密にしながら継続して食育指導を実践し、指導内容がよりよいものになるよう、情報を共有しながら修正・改善を重ねていくこととした。また、中学校における食育の取組みが課題であったため、毎月19日頃（さがえ食育の日）、給食時間に各中学校を訪問し、「昼の放送」を活用しながら、テーマに沿って食の大切さを伝えていくこととした。

II 研修の進め方

- 1 小学校では、「9ヵ年を通した食に関する指導計画」に沿って、計画的に指導を実践していく。中学校においては、月別のテーマを設定し、食育放送を実践していく。
- 2 担当する小学校での実施計画を把握し、授業実践を行う。中学校においては、給食主任と日程等の連絡調整を行い、食育放送日を決定し実施していく。
- 3 指導内容がよりよいものとなるよう、振り返りや課題などの情報を共有していく。

III 研修の概要

1 第1回研修部会

- (1) 日 時 5月30日（火）
- (2) 会 場 寒河江市立陵南中学校
- (3) 内 容 今年度のテーマ・取組み内容の検討



2 第2回研修部会

- (1) 日 時 6月23日（金）
- (2) 会 場 寒河江市立柴橋小学校
- (3) 内 容 教材確認、中学校食育放送テーマの検討決定



3 第3回研修部会

- (1) 日 時 11月17日（金）
- (2) 会 場 寒河江市立南部小学校
- (3) 内 容 授業実践・食育放送の経過報告



4 第4回研修部会（1月中旬に今年度の振り返り、課題等をまとめる）

IV おわりに

市内全体での食育の取組み2年目となり、計画的に、そしてスムーズに指導を進めることができた。また、中学校においても月1回の食育放送へ理解と協力をいただき、中学生へ食の大切さを伝える場を設けることができた。一步一步前進し、継続していくことで子どもたちの力となるよう、私たちの学びも更に深め、次年度へつなげていきたい。（大久保郁美）

5 学力対策委員会

一人一人に確かな力を ～「個に応じた指導」の充実に向けて～

I はじめに

令和3年1月26日の中央教育審議会で、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」が取りまとめられた。「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念である「個に応じた指導」の充実が求められている。

学力対策委員会議では、全国学力学習状況調査などから明らかになった成果と課題を共有し、子どもたちが自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、ICTを活用した「個に応じた指導」に焦点を当てて話し合いをした。

II 学力対策委員会議から

1 「新しい授業・教育活動の在り方」について

- (1) 自分に最適な学びを自力で計画・実行できる子どもを育成する。

「学び方」の得意に気づき、自力で学び進められるようにする。

「学び方」の得意… 同じ学習内容でも、この方法なら上手にできる、気持ちよく取り組めるなど、個に応じた思考の形・時間で取り組むこと。

「学ぶ領域」の得意に気づき、自分の世界を拡充していける。

「学ぶ領域」の得意… 好きな教科や将来の夢につながる分野など、一人一人に応じた学びの領域に、思う存分取り組むこと。

- (2) 学びの主体である子どもが、教師の支援の下、自らにとって「最適な学び」は何なのかを判断しながら、自立的に学び進められるようにしていく。

【これまでの一斉指導】
教師が圧倒的な情報量。
それを基に子どもへ伝
達ベース。

子どもが自ら「学び取る」教育へ
→
子どもが「学び方を学ぶ」教育へ

【これからの授業】
教師も子どもも等しくデータへア
クセスが可能。自ら情報を収集、
整理・分析し、表現していく形へ。

2 子ども自らが「学び取る」教育・子どもが「学び方を学ぶ」教育に向けて

- (1) 教科書やタブレットPC端末などに載っている情報からの知識の学び取りを認めるなど、自ら学ぼうとする主体的な姿を認め、育てていく。
- (2) 集めた情報について、判断基準を基に精査（ファクトチェック含む）・解釈するなど、「整理・分析」場面を充実させる。

3 情報を「整理・分析」する上で必要な、文章を正確に読み取る力「読解力」の育成に向けて

- (1) 指導者が「解像度」を高くして教科書を読み、教科書を使い倒す授業づくりを行う。

III おわりに

「個に応じた指導」の充実を図るために、子どもたちは、適切な環境さえあれば、自ら環境に関わり学ぶ力をもっている有能な学び手であると、私たちの教育観・指導観を転換していく必要があると考える。子どもが自ら「学び取る」教育・子どもが「学び方を学ぶ」教育の実現に向けて日々研究と修養を重ね、本市の子どもたちの更なる学力向上に努めていきたい。

(小関 直幸)